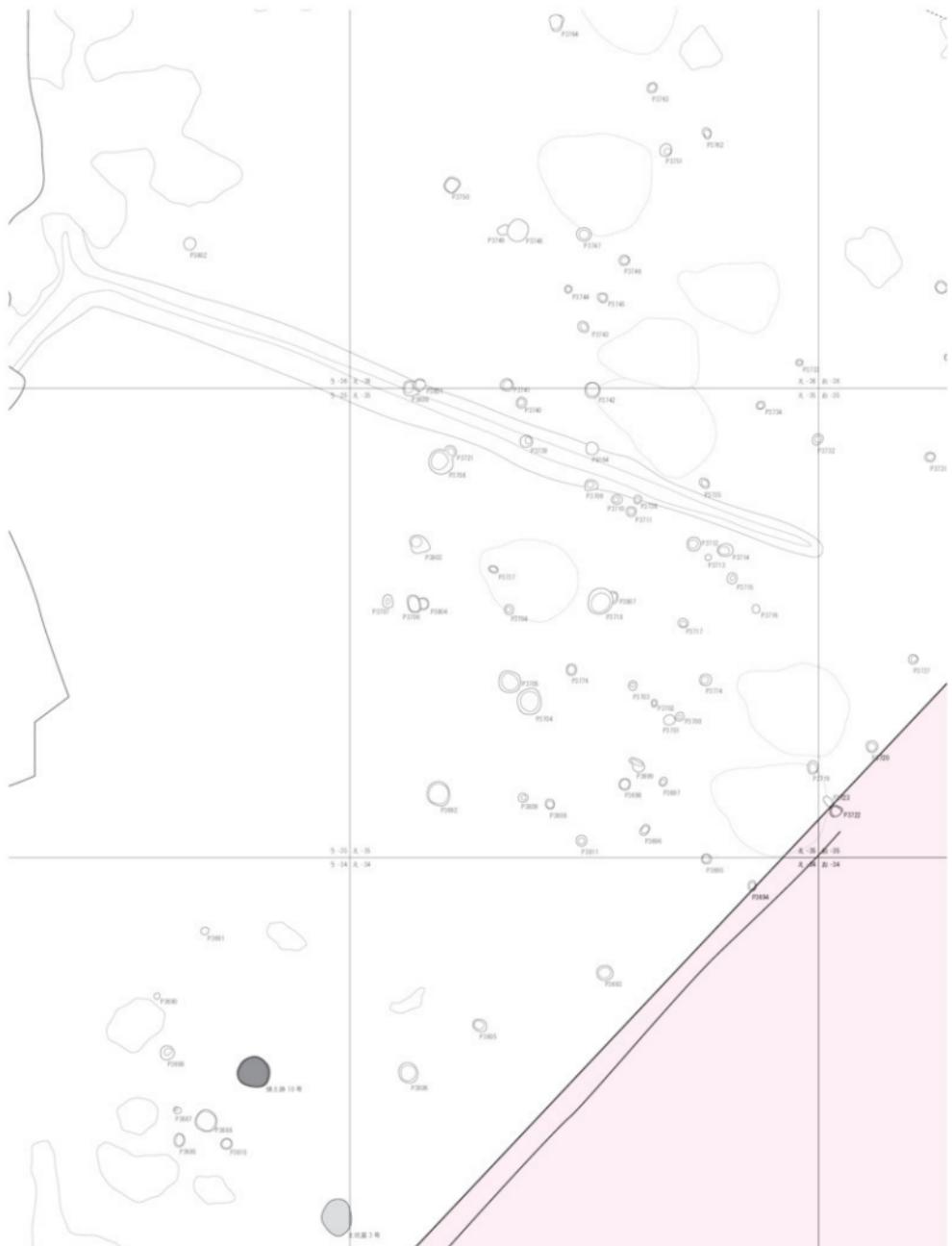


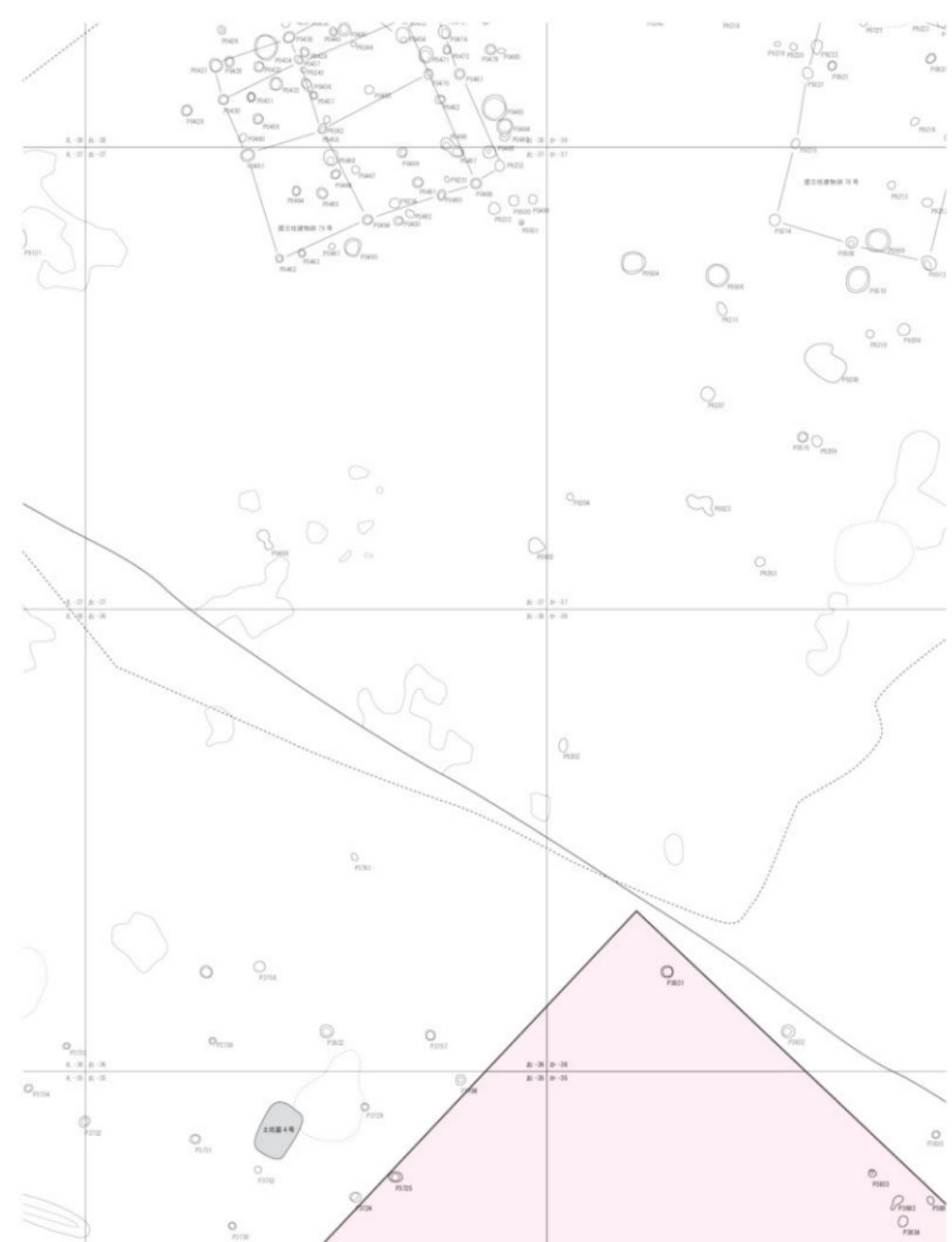


第171図 詳細遺構配置図(2)

第172図 詳細構成図(2)



第173図 詳細構成図(2)



第174図 詳細構成図(2)

第175図 詳細遮構配置図(24)



第176図 詳細造構配置図25

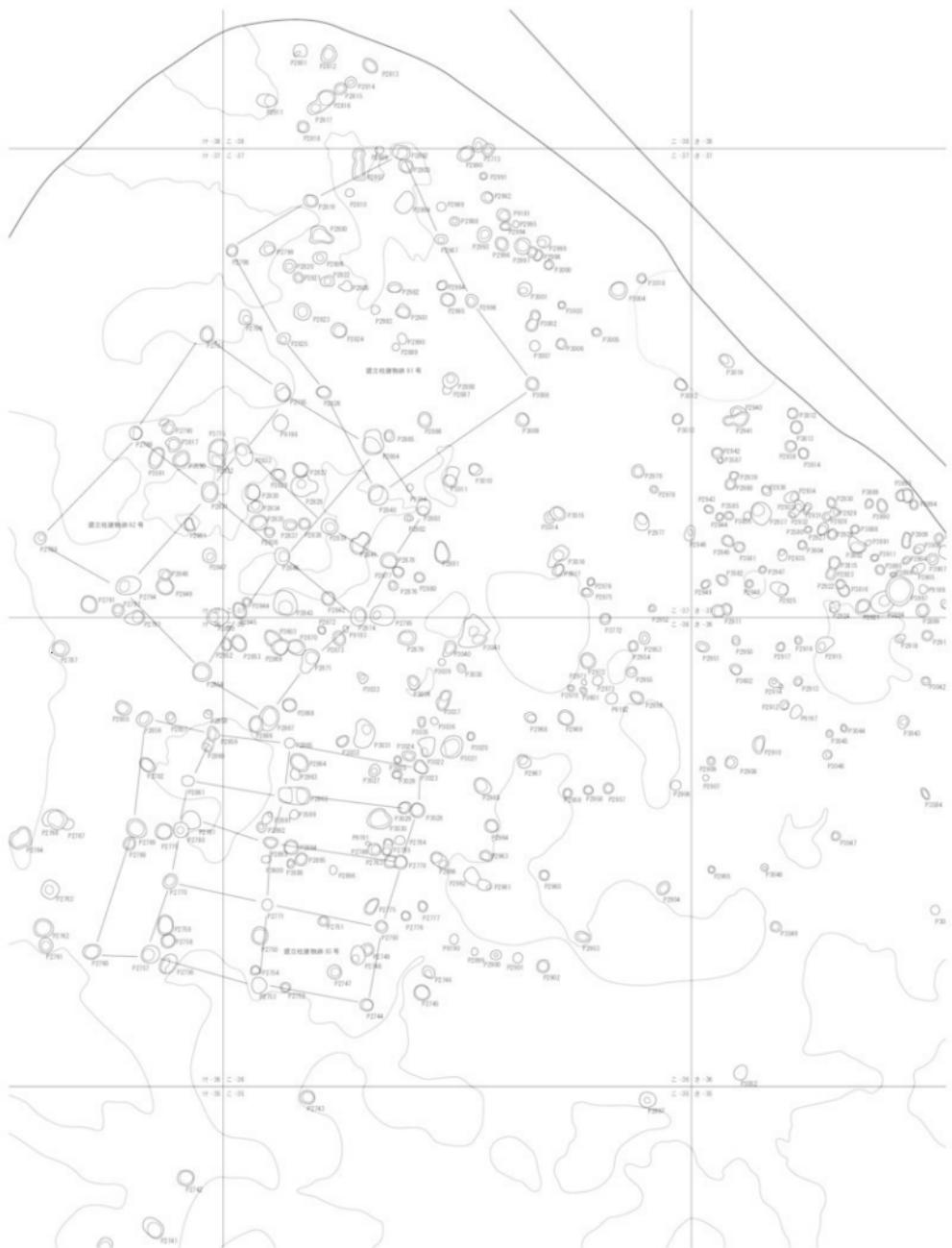


第177回 詳細構成図(26)



第178図 詳細造構配図(2)

第179回 詳細遺構配置図(28)



第180図 詳細造構配置図(2)



第181図 詳細造模配置図(3)



第182図 詳細造構配置図(3)

第VII章 総括

半田口遺跡は古代～中世にかけての遺跡である。遺構・遺物はこれまで城久遺跡群で出土したものと同様の部分が多い。以下、それらについて若干の考察を加え、まとめしたい。

1 遺構

(1) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は97棟検出した。出土した掘立柱建物跡は柱穴や主軸方向が異なるものが切りあっているものを見られた。また、本遺跡は山田半田遺跡から連続する遺跡であると考えられる。

A地区ではF-G-36区に柱穴が密集していた。近世カマドに切られている柱穴も多かった。

B地区では比較的柱穴の重複が少ないとこころがあり、その部分には掘立26-27号などの四面に庇を持つ建物跡を検出した。山田半田遺跡掘立40-41号に見られるように2棟重複して検出し、両建物跡はほぼ同規模・同軸方向の建物跡である。柱筋はほぼきれいに並んでおり、26号の柱穴内からは滑石製石鍋、27号からは白磁が出土しており、11～12世紀代の建物跡であると考えられる。

あ～C-33区には柱穴跡が密集している部分を検出している。標高はA地区で柱穴が集中していた範囲とほぼ同じである。

C地区ではあ～B-36区付近で比較的多くの柱穴が見られたが、比較的柱穴の密度は少なかった。あ～38区周辺では4面庇状建物跡などを確認することができた。

掘立72号は古代の遺物のみ出土した建物跡で、2×3間の側柱建物跡である。同軸方向もしくは直交する方向を主軸とする建物跡に掘立59-60-67-68-70号がある。これらは柱穴内から越州窯系青磁・滑石製石鍋が出土しており、10～11世紀代に柱穴が埋没したものと考えられる。このことなどから掘立72号とはほぼ同時期に展開していた可能性が高い。また、これらの建物跡の周囲には土坑5号があり、こちらからも9世紀後半～11世紀代の様相を示すものしか出土していない。古代を中心とした遺構群がこの面に展開していたと推察している。

掘立69号は1×1間の建物跡の周囲を取り囲むように柱穴が18本廻る遺構である。柱穴内からは滑石製石鍋などが出土していることから11～12世紀代の遺構であると考えている。また、この建物跡の中央部分にも柱穴が見られ、この建物跡に隣接する可能性も考えられる。主軸方向などから、掘立61-66号などが同時に展開していた可能性が高い。

掘立47号など床を持つ純柱建物跡からはカムイヤキ等が見られることから純柱系の建物は11～12世紀代ごろに構築されたと考えられる。

D-E地区では大部分石灰岩が露頭していたと見られ、石灰岩のないわずかな範囲に柱穴が密集していることがうかが

える。

なお、各地点で近世カマドが内部にある建物跡が散見される。これらは柱穴埋土からも近世と考えられ、このカマド跡に伴う遺構であると考えられる。

(2) 土坑墓

大きく分けると焼けた人骨が見られるものと土葬のみのものがある。

焼けた人骨を伴う土坑墓

土坑墓2号は方形土坑の南側に焼けた人骨と炭化物の塊が安置されていた。近世カマドにより削平を受けている。副葬品は検出できなかった。

土葬墓

土坑墓1号～5号が該当する。土坑墓1号は長方形状で、人骨は検出できなかつたが、土坑の形状からおそらく伸展葬気味に埋葬されていたと考えられる。明瞭に検出できたのは歯の部分のみであった。

土坑墓4号は屈葬で埋葬されていたと見られるが、腐食が激しく、骨の大部分は未検出であった。副葬品は出土していない。

土坑墓5号は近世カマドによる削削を受け、中央部分はなくなっている。土坑南側には頭骨が見られた。カムイヤキは足の部分に安置されていると想定できる。これまでの調査では頭骨周辺に安置されている事例はあったが、足下に安置されているのは初めての検出事例である。

(3) 土坑

いくつか検出しているが、それの中でも、土坑5号は9世紀後半～11世紀代の遺物が出土する土坑である。第104号103～123が相当する。土器類・壺・甕・須恵器、越州窯系青磁、石器等が構成されている。これまでの調査の中で得られなかった古代の良好な一括資料群ととらえることができる。

(4) 焼土跡

半田口遺跡ではいくつかの焼土跡を確認した。これまでの城久遺跡群の調査では焼土跡を以下のように分類している。

1類：平面形状は2つ重複し一方がやや深くなるもの。

2類：20-30cmの円形のもの。被熱面のみ残存しているものもある。

3類：2類よりも二回りほど大きく下部に炭化物層を有するもの。

4類：不定形な被熱面のみ残存するもの。

今回検出したものはすべて3類に該当する。時代は山田半田遺跡の成果から、近世を想定している。

2 遺物

(1) 古代相当の遺物

土師器

土師器は壺を主体とし、椀・壺類は少量出土している。

椀・壺は精製された胎土が使用されていることなどから、本土からの搬入品であると考えられる。椀・壺のほとんどは9世紀後半～10世紀前半の資料と見られる。

甕については、口縁部の特徴からいくつに細分可能とみられる。鹿児島県の土師器甕を集成した松田氏（松田 2004）によると口縁部が長いものから短くなる傾向があるとされる。

須恵器

須恵器は壺・甕が出土し、椀類は出土していない。

半田口遺跡で出土した須恵器も肥後のものはなく、時期は9世紀後半以降のもので、南九州産が主体のようである（註1）。南九州でその時期の窯は南さつま市金峰町中岳山麓などが知られている。

須恵器の破片を転用した加工品も出土しており、内外面や破断面が擦られれている。墨痕等は観察できなかったため、転用窯があるかどうかは不明である。

初期貿易陶磁器

越州窯系青磁I～III類が出土している。本遺跡ではIII類の水注片（第28図9）も出土している。また、本町で初めて緑釉陶器（第74図62）も出土している。

(2) 中世相当の遺物

貿易陶磁器

両遺跡とも出土した中世相当の陶磁器には白磁・青磁・陶器が認められる。白磁は太宰府分類椀IV・V類、龍泉窯系青磁、初期高麗青磁などが出土している。白磁椀はこれまでの調査成果と同様にIV・V類が圧倒的主体を占めている。龍泉窯系青磁は蓮瓣弁挽などがわずかに出土している。

無釉陶器

無釉陶器には朝鮮系無釉陶器とカムイヤキが相当する。朝鮮系無釉陶器は北部九州を中心に研究がなされ、本土系須恵器と胎土や焼成、調整等が異なる点を手がかりに分類されている（山本2003、山崎1993、赤司1991）。

朝鮮系無釉陶器とカムイヤキとは非常によく似ているが、以下の特徴から判別が可能である。

- ① カムイヤキは朝鮮系無釉陶器と比べ胎土は粗く、混和される砂粒の量も多い。
- ② カムイヤキの割れ口の破面は凹凸が認められ、隙間も多い。
- ③ カムイヤキはナデ調整が徹底されていないため、内外面ともに成形痕を多く残している。

今回検出したカムイヤキはほぼカムイヤキA群である（伊仙町教育委員会2005）。A群は11世紀後半から13世紀前半代頃に位置付けられる。

滑石製品

出土した総重量は約13.5kgである。これまでの調査のものを含めると83.5kg出土している。出土した滑石製石鍋は縦耳を有するものののみであり、木戸編年II類（11世紀頃）、山本・山村編年中世I期（11世紀後半～12世紀前半）に該当する（木戸1995、山本・山村1997）。

滑石製石鍋に対しては様々な加工が施されており、破断面に擦り切り技法を用いた痕跡が見られるものや貫通穿孔が施されているものがあった。穿孔部には鉄が混入したままの状態のものがある。

これらは石鍋としての機能を終えた際に加工された可能性と、元々破片の状態で持ち込まれた可能性が考えられる。いずれにせよ、擦り切り技法を用いてある一定のサイズへ加工し、二次加工品への素材としているようである。

二次加工品に関してはバレン状・棒状・錘状など様々な形がある。バレン状製品は平面を方形形状もしくは円形状に加工し、つまみの部分に横位貫通穿孔が施されているのが特徴である。つまみ部分の穿孔か所の上部から破損しているものが多い。宮崎県八兒遺跡では補修具としての利用方法が発見されている。本遺跡でも同様に補修具として使用されていた可能性が高い。

ガラス玉

ガラス玉は柱穴内からわずかに確認することができた。いずれも白色を呈しており、表面は風化していた。

ガラス玉は城久遺跡群以外にも喜界町七城周辺からカムイヤキ壺の中から白色を呈するガラス玉が出土している（白木原1971）。今後産地なども含め、検討を進めていきたい。

まとめ

掘立柱建物跡ではC地区に古代の様相を示す建物跡群と土坑を検出した。古代とみられる建物跡は2×3間の掘立柱建物跡で左右対称である。あ-39区からB-37区付近に遺構群が見られる。掘立26-27-69号などの建物跡の周囲を柱穴が囲んでいる建物跡はこれよりやや後出するようである。掘立26-27号は2×3間の周囲に柱穴が取り囲む建物跡である。これらは山田半田遺跡40-41号、大ウフ遺跡41号と類似する形状である。主軸方向は山田半田41号とほぼ同じである。掘立69号は1×1間の建物跡の周囲を柱穴が取り囲む建物跡である。類似する遺構は山田半田遺跡掘立21号-58号、前堀掘立65号、小ハネ遺跡掘立1号、大ウフ遺跡32号が見られる。四方を柱穴が取り囲む建物跡の数は少なく、各遺跡に1つないし2つか確認できなかった。これらのことからも各建物跡は各地点での中心的な機能を有していた建物跡と

考えられる。

總柱建物跡は柱穴内からカムイヤキが出土することなどから、11～12世紀代と考えられる。

土坑墓は火葬・土葬を確認した。前回までの成果から①須恵器の藏骨器を伴う火葬→②カムイヤキ・白磁・ガラス玉等を副葬品とする再葬墓→③副葬品をもつ土葬墓→④副葬品を持たない土坑墓への時間変遷を想定している。本遺跡で確認できたのは火葬されたものは焼されている部分が多く不明であるが、土葬のものは③と④が確認できた。

また、これまでの調査と同様に溝状造構はほとんど見られなかった。平面図上に検出している溝状造構は近世に相当するものである。

出土遺物はこれまでの調査成果と同様で、ほぼ島外産のもので占められるという特徴がある。各地点で明瞭な時期差は見られなかつたが10～12世紀代の遺物、特に11世紀後半～12世紀頃の遺物が多く検出されている。

中世では初期高麗青磁、朝鮮系無釉陶器、綾耳の滑石製石鍋といった鹿児島県内でもほとんど出土していないものがまとめて出土している。

半田口遺跡は山田半田遺跡と隣接する部分、遺跡の南側約13,000m²を盛土工法で保存することができた。保存できた範囲の周辺には掘立26・27号などの建物跡も見られ、同様の遺構群が展開している可能性が非常に高い。

今回の報告の中では建物跡の分類、遺物編年を十分に行うことことができなかつた。今後城久遺跡群全体の資料整理を通じて再検討していきたい。

(註)

1 熊本市文化振興課 綱田龍生氏の御教示による。

引用・参考文献

- 赤司善彦 1991 「朝鮮系無釉陶器の流入－高麗期を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』16
- 池田栄史 2007 「律令体制の南進問題」
- 「季刊考古学」第100号
- 伊仙町教育委員会 2005 「カムイヤキ古窯跡Ⅳ」
- 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書 12
- 池畠耕一 1998 「考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『渡辺誠先生還暦記念論集列島の考古学』
- 亀井明徳 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号
- 喜界町教育委員会 2006～2011 「城久遺跡」
- 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（8～11）
- 新里亮人 2003 「琉球列島における窯業生産の成立と展開」『考古学研究』第49卷第4号
- 白木原和美 1971 「陶質の壺とガラスの玉」『古代文化』23・8・9（財）古代学協会
- 猿川真一 2008 「城久遺跡群の中世墓」『古代中世の境界領域－キカイガシマの世界－』高志書院
- 太宰府市教育委員会 2000 「大宰府条坊跡XV～陶磁器分類編－」太宰府市の文化財第49集
- 中村和美 1997 「鹿児島県内における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号
- 降矢哲男 2002 「韓半島産陶磁器の流通－高麗時代の青磁を中心に－」『貿易陶磁研究』22
- 松田朝由 2004 「高麗遺跡 第Ⅷ章 まとめ 第1節 土器の製作技術と土器様相」『九箇国・鹿場・高森遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター (71)
- 山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性－九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』71
- 高志書院 2008 「古代中世の境界領域－キカイガシマの世界－」